

日本の教会の戦後 50+20 年

～戦後 70 年ブックガイド～

節目の視点、戦後 70 年の年に読んでおくべき本、薦める本

巻 頭 言

東京基督教大学図書館では、戦後 50 年の 1995 年に、かなりのボリュームのブックリストを作成しました。清水汎館長の巻頭言は「昭和 20 年 5 月 3 日、9 歳年上の兄が潜水艦伊 44 号とともに沖縄の海に沈んだ」と始まり、以下のように締めくくられています。

「戦争とは何か。勝敗とは何か。加害者とは何か。被害者とは何か。これらについて書かれたものを読もう。(中略) 私どもが『さばきについて彼らは知っていない』(詩 147:20) 民であることを肝に銘じよう。その時初めて、日本のクリスチャンにとってヨベルの年が始まる。」

戦後 50 年、そこまで営々と築き上げた国際協調主義は村山談話を生み出し、教会の戦争責任告白も相次いで出されました。これは通過点のはずでした。しかし、経済における新自由主義とこれに連動する歴史修正主義の中で迎えた戦後 70 年は、解釈改憲による安全保障関連法案国会審議の夏となりました。今にして思えば、戦後 50 年はアジアにおける協調主義の一つの頂点でした。

2015 年 8 月 9 日、長崎の原爆 70 年平和記念式典が、75 カ国の大使らを迎え 6800 人が参列して行われました。田上富久市長は、平和宣言で参院で審議中の安全保障関連法案に言及し、「憲法の平和の理念が揺らいでいるのではないかという不安と懸念が広がっている」と指摘、会場から拍手が起こり、総理は居心地が悪そうでした。戦争を知る世代は勿論のこと、戦争責任にはさほど関心もなく改憲もありと考える若者が、戦争に向かう政治に敏感に反応し、学びを始めています。

今回のブックリストは、戦後 50 年以降の 20 年を意識して編まれています。今回も東京基督教大学の学生サークル「ザーカル会」と、新たに 15 人の方々から本の推薦とコメントをいただきましたことを、心より感謝いたします。70 年を越えて「戦後」を続けてゆくための読書と祈り、行動を続けつつ、ヨベルの年を待ち望みましょう。このブックリストがそのための一助となれば幸いです。

2015 年 8 月 15 日

東京基督教大学図書館長代行

山口 陽一

* ベルの年-----レビ記 25 章に記された 50 年目の解放の年。

これから学ぶ人のための 9 冊

Presented by ザーカル会

ザーカル会とは、東京基督神学校で生まれたサークルで、日本と教会の「戦争責任」を学び「記憶する」（ヘブライ語：ザーカル）ことを目的とした祈りと学びのグループです。現在は東京基督教大学のサークルとして、読書会を中心に活動しています。今回は、これから学ぶ人のための推薦図書を、過去 20 年の間に出版された比較的新しい書籍の中から選び、テーマ別で紹介します。

■ 日本キリスト教史

1 『日本キリスト教宣教史：ザビエル以前から今日まで』

中村敏（いのちのことば社、2009）



戦後70年の諸問題と向き合う第一歩は、歴史を学ぶ事です。それも、特定の歴史的出来事を「点」で理解するのではなく、そこに至らせた要因や、その背景となったそれ以前の歴史も押さえつつ、歴史全体の「流れ」を理解することが重要です。本書は、「戦後」を理解する上では欠かせない戦前の歴史も網羅した通史が簡潔にまとめられています。一度読み通した後、資料として手元に置いておくことをお勧めします。

■ キリスト者の戦争体験

2 『戦争で死ぬための日々と、平和のために生きる日々』

渡辺信夫（いのちのことば社、2011）



カルヴァンのキリスト教綱要、教会論、平和活動、原爆問題、沖縄、そして戦争反対。これらの事柄に深く関わり、心血を注いで取り組んでいる著者の原体験が記されています。1943年に20歳だった著者が戦争の前後で何を見、何を考え、いかに変わったか。キリスト者の生き方そのものが強く問われます。この本はただの体験記ではなく聖書からクリスチャンとして戦争を考えるための深いきっかけを与えてくれます。また渡辺信夫という人物の思想的背景を探る上で入門的な本となるでしょう。

■ アジア諸国との関係



③ 『岐路に立って：父・朱基徹が遺したもの』

朱光朝：野寺恵美訳（いのちのことば社、2012）

本書は、戦時中、日本政府による神社参拝強要を拒否し、獄中にて殉教した韓国の牧師朱基徹(チュキチョル)についての、四男朱光朝(チュカンジョ)による証言です。そこには、神社参拝に最後まで抵抗し続けた朱基徹牧師の信仰や、家族の心境等がリアルに記されています。決して忘れてはいけない、日本がアジア諸国に対して行った行為を直視する一冊であり、また、キリストを信じキリストに従うとはどういう事かを問われる一冊です。

■ キリスト者の平和論・戦争論



④ 『キリスト者の平和論・戦争論』 岡山英雄ほか（いのちのことば社、2009）

戦後70年の今、「積極的平和主義」という言葉と共に、あらためて「平和」のあり方が問い直されています。本書は、キリスト者の間でも決して一枚岩ではない平和論・戦争論について、聖書と歴史の両面から学べる一冊となっています。聖書からは、岡山英雄が旧新約聖書全体を考察し、基本線を提示します。歴史については、李象奎（イサンギユ）による教父時代、渡辺信夫による宗教改革期の考察を中心に、時代の中で揺れ動いてきた平和論・戦争論の歴史的展開を押さえることができます。

■ 戦時下におけるドイツの教会の戦い



⑤ 『バルメン宣言の政治学』 宮田光雄（新教出版社、2014）

しばしば戦時下の日本の教会の歩みと比較されるのが、ナチ政権下でのドイツ告白教会の戦いです。特に、国家による教会支配に抗して彼らが表したバルメン宣言は、その後の戦いの共通の基盤となりました。特に、教会と国家の関係を明らかにし、自分たちの立つべき信仰を明言し告白するその内容は、現代の私たちのあり方を深く問うものとなっています。本書は、バルメン宣言について、その歴史的背景から神学的基本線までが、わずか54ページとコンパクトに解説されています。

■ 信教の自由



⑥ 『信仰の良心のための闘い―日の丸・君が代― 強制に抗して』

岡田明、袴田康裕ほか（いのちのことば社、2013）

戦中の教会が抗うことのできなかった偶像崇拜の罪。敗戦から70年が経ち、信教の自由が保証されている現在も、なお、私たちは、日の丸・君が代強制という形でその問題と直面しています。本書には、日の丸・君が代のもつ歴史的問題、強制が進んだ経緯、現場で闘う教師の生の声が丁寧に記されています。私たちの生活のなかに当たり前のように入り込んでくる日の丸・君が代について、もう一度問い直す大きな助けとなる一冊です。

■ 改憲問題



7 『クリスチャンとして「憲法」を考える』

朝岡勝、片岡輝美ほか（いのちのことば社、2014）

キリスト者として生きることと憲法を考えることに関係があるのか？震災や原発被災者の支援、様々な差別との闘いを経験してきた著者たちの言葉を記す本書は、憲法を考えることがまさに『信じたとおりに生きること』に直結していると教えてくれます。改憲議論の高まり、内閣による解釈改憲や安保法案の違憲問題。日本全体で憲法が問われ続けている今この時、クリスチャンとして憲法を考える第一歩として、是非手にとってほしい一冊です。

■ 靖国問題



8 『靖国問題』 高橋哲哉（ちくま新書、2005）

靖国神社は、戦後の日本の歩みの中で常に議論の対象となり、国内外に対して大きな影響力を持ってきた象徴的な場所です。「靖国問題」と一言で表しても、その背後にはさまざまな問題が複雑に絡み合っていますが、本書はこの問題を「感情の問題」「歴史認識の問題」「宗教の問題」「文化の問題」「国立追悼施設の問題」と整理し、丁寧に解説します。

「まずは事実を把握する」という意味で、靖国問題の全体像をとらえるのに最適な入門的一冊です。

■ 沖縄問題



9 『「集団自決」を心に刻んで』

金城重明（高文研、1995）

本土防衛のための捨て石とされた沖縄、その極限状態で引き起こされた住民たちの「集団自決」。その惨劇を経験した著者は、自らを戦争被害者、そして、戦争加害者と呼び、何よりもキリスト教信仰に立ちながら、その歴史的事実と日本の戦争責任について考察していきます。著者の人生と深く結びついた言葉たちは、現在の多様な沖縄問題のすべてを語り尽くすものではないかもしれませんが、しかし、この言葉を抜きに沖縄を考え始めることはできない、と思わされる一冊です。

識者による推薦図書

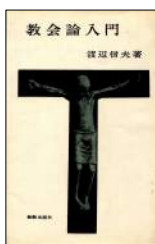
戦後70年、認識と理解を深める本

朝岡勝、石浜みかる、大嶋重徳、高木実、崔善愛、辻幸弘、徳永大、中村敏、袴田康裕、
廣瀬薫、吉川直美、宮脇聡史、柳沢美登里、渡辺祐子、山口陽一 15名

このアンケートは、若い世代の皆さんに贈るブックガイドです。「戦後70年の年に、戦争・平和に関するキリスト者に読んでほしい本」について、選者の専門にかぎることなく幅広い分野で選書頂きました。タイトル前に①②③④の表示がある本は、次の観点で選ばれています。①これだけは読んでほしい本、②特に高校・大学生に読んでほしい本、③自身の読書から印象に残っている本 ④さらに読んでほしい本。 本は、読者の便を図り新書、文庫で出版されている場合はそちらを掲載し、品切れ中の本も掲載しました。

朝岡 勝（牧師、特定秘密法案に反対する牧師の会共同代表）

●『教会論入門』渡辺信夫(新教新書、1963)



生涯の中で何度も読み返すに値する本がある。僕にとって聖書と並んで、幾度となく手にしてきたのが本書。日本の教会を見つめる視点は、50年たった今でもまったく色あせないばかりか、ますます預言者的響きを増している。自分の神学的思考がどこにいるか、どこまで深められているか、どこが見えていないかを確かめる定点観測のような一冊。

●『教会が教会であるために：教会論再考』渡辺信夫(新教新書、1992)



前著から30年後に、同じ著者が同じテーマで記したもの。日本の教会が本質的にいか変わっていないかを知るとともに、著者の神学的視座がまったくぶれていないことにも驚く。今、僕たちが獲得しなければならないのは、こういう神学的視座なのではないか。

●『戦争の罪責を担って』渡辺信夫(新教新書、1994)



戦後50年を前にして語られた三つの講演。著者は戦後70年一貫して日本における教会と国家を問い続けているが、国家はますます危惧される方向に進み、教会もまたますます弱体化の一途を辿っている。なんとかこの流れをとどめ、流れを変えなければならない。

●『今、教会を考える：教会の本質と罪責のはざままで』渡辺信夫(新教出版社、1997)



戦後50年の年になされた多くの講演を含む講演集。日本の教会が視野に収めるべき重要な課題がいくつも提示されている。後に続く僕たちが掘り下げ、思想化し、実現させ、受け継いでいかなければならない課題は多い。

●『戦争で死ぬための日々と、平和のために生きる日々』 渡辺信夫(いのちのことば社、2011)



戦後 70 年を迎えて、あらためて若い人々に手にして欲しい必読の書。著者の遺言的な響きがある。僕も『推薦の言葉』を書かせていただきました。

石浜 みかる (文筆家)

●『満洲暴走 隠された構造 大豆・満鉄・総力戦』 安富歩 (角川新書、2015)



歴史教育で、オールド世代は植民地獲得を誇る「国史」しか学びませんでした。敗戦後育ちのミドル世代は、植民地記述をカットした日本近代史を学びました。ヤング世代の多くは、日本近代史そのものを学ばない高校時代を過ごしています。長期にわたる大日本帝国の戦争を持続可能にした宝庫「満州国」(中国東北地区)とはどんな存在だったのか。目からウロコが落ちるわかりやすさ！ 選挙権を得た十代の方たちに特に読んでもらいたい本です。

●『七三一部隊のはなし:十代のあなたへのメッセージ』 西野留美子 (明石書店、1994)



日本軍は「満州国」で、細菌戦兵器製造のために生体実験をし、実戦に使用していました。実験材料とされた人たち(主に中国人男性、女性、赤ん坊)のデータは、敗戦後闇に葬られました。『悪魔の飽食』(森村誠一著)のように勇気をだして発掘した人がいて、日本人ははじめて闇の深さを知ったのでした。著者は戦後 50 年に、七三一部隊の隊員たちを訪ね信頼を得て、真実の姿を語ってもらったのでした。戦後 70 年がたち、当事者の老人たちがほぼこの世を去ったいまこそ、十代のあなたに受けとめてもらいたい戦争の記憶です。

●『忘れられた巨人』 カズオ・イシグロ (早川書房、2015)



イギリスの 1500 年前の老夫婦の愛の物語かと思っていたら、この小説の隠しテーマは、人と人、民族との民族「屈辱と復讐」の連鎖です。現代人がまさに直面している問題を、神話とミックスして語っています。先住民ブリトン人(諸ケルト系)に平和をもたらしたのはアーサー王と騎士たちだとの神話が信じられてきました。そこにサクソン人(諸ゲルマン系)がぞくぞく海を越え上陸してきます(古代日本列島への諸族渡来のように)。読んでいるうちに、老夫婦の信頼に満ちているようなおだやかな関係にさえ実は屈辱と復讐があることが迫ってきます。カズオ・イシグロは 1954 年長崎生まれ。

①『バルメン宣言を読む 告白に生きる信仰』朝岡勝（いのちのことば社、2011）



「なぜドイツではバルメン宣言が生まれ、日本の教会には教会の闘いが出来なかったのだろうか」という疑問を抱えながら、2008年に朝岡勝先生をKGKにお迎えして、お話を頂いた内容です。聖書にきちんと立つからこそ、教会は教会の闘いがあるのだということを学ぶことの出来る一冊です。

①『戦争の罪責を担って：現代日本とキリスト者の視点』渡辺信夫（新教新書 1994）



渡辺先生の本はいずれも名著です。私がこのテーマを考えるのにあたって「ものの見方」を教わってきた本です。特にこの本は学生時代に初めて手に取った一冊です。キリスト者としてどのような視点を持ち、アジア、韓国、沖縄をどのように考えていけば良いのかを学ぶことを始めた本でした。

①『靖国問題』高橋哲哉（ちくま新書、2005）



日本でキリスト者として生き、聖書の世界観歴史観に生きていこうとする時に必ずぶつかるのが、靖国神社の世界観歴史観です。靖国史観がキリスト教信仰と、何がどのようにぶつかるのかを理解する意味でも、非常に役に立つ本です。避けて通れない靖国神社理解のための一冊でしょう。

②『たといそうでなくても』安利淑（待晨社、1972）品切れ



母の書棚の中にあった本で、中学生か高校生の頃に読んで、一人で号泣したことを思い出します。神を信じ生きることへの覚悟と勇気を本書から受け取りました。また日本が韓国の教会に何をしたのかを知った最初の本でした。

②『嵐の中の教会 ヒトラーと戦った教会の物語』O.ブルーダー（新教新書、1989）



戦争が起こると教会には何が起こるのかを知れる一冊です。リンデンコップ村にある教会とグルント牧師の生き方に勇気を得る一冊。国家からの弾圧という嵐の中を、教会がどのように告白に生きていくのかを知ることが出来る、ぜひ読んで欲しい一冊です。

②『万歳事件を知っていますか』木原悦子（平凡社、1989）



堤岩里教会で起こった出来事を、克明に記されている一冊。韓国での独立運動とそこに信仰者として生きていたキリスト者達の迫害のストーリーを証言と共に読むことが出来ます。『神社参拝を拒否したキリスト者』（新教出版）ともあわせて、日本軍が韓国で一体何をしたのかをきちんと知る事の出来る一冊です。

③『国家と宗教：ローマ書十三章解釈史＝影響史の研究』宮田光雄（岩波書店、2010）



このテーマを考え始める中で必ずぶつかるローマ書13章の『人はみな、上に立つ権威に従うべきです』という言葉は、歴史の中でどのように解釈されてきたのか。時代の制限のなかで聖書が読み解かれて来た歩みを自覚させられ、私達がこの時代の中に生かされつつ、聖書をどのように読むのかをチャレンジさせられます。

③『ドイツ教会闘争の展開』雨宮栄一（日本基督教団出版局、1980）



バルメン宣言の学びをしながら、ドイツに教会闘争が起こり、日本になぜ教会闘争が起こらなかったのかを考えながら、読み進めた一冊です。丁寧にドイツ教会闘争の歩みを概観しつつ、告白教会のキリスト者の間にも意見の違いがあり、その違いがもたらすものが何かということをも考えさせられます。

③『嵐の中の牧師たち：ホーリネス弾圧と私たち』辻宣道（新教出版社、1992）



『嵐の中の教会』を意識されて名付けられたこの一冊は、日本の教会を襲った国家からの弾圧の嵐の中、牧師家庭に何が起こったのかを知ることの出来る一冊です。そして日本の教会に何が起こってしまったのかを、牧師の子どもの眼差しから描かれるところは、非常に注目です。

④『国家を超えられなかった教会 15年戦争下の日本プロテスタント教会』原誠（日本キリスト教団出版局、2005）



戦時下のプロテスタント教会で何が起こり、どんなことを牧師たちが口にしてしまい、偶像礼拝が教会でどのように起こったのかを知ることの出来る詳細な資料があります。この歴史を見る時に、この悔い改めに立って戦後、キリスト教会は立て上げられてきた筈なのだと、この時代に生かされている私達の取るべき態度決定を考えさせられます。

④『罪責を担う教会の使命』雨宮栄一ほか編（新教出版社、1987）



日本の国家戦争責任と、教会の戦中の罪責との違いを理解していくためにも、必要な一冊です。論集なので、このテーマを何人もの著者が短い文章で的確に書き表してくれています。

④『服従と抵抗への道：ボンヘッファーの生涯』森平太（新版、新教出版社、2004）

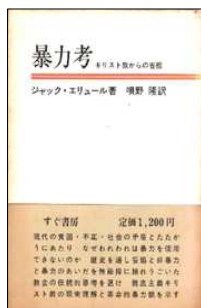
このテーマを学ぶ時に起こりやすいのは、自分自身の信仰の不甲斐なさに落ち込むことです。しかしボンヘッファーの生涯に出会う時、このように生きることの出来る信仰を神様は与えてくださるのだという勇気を得ることが出来ます。私達にはモデルが必要であり、ボンヘッファーはそのモデルです。

●『聖書と戦争 旧約聖書における戦争の問題』P・C・クレイギ（すぐ書房、改訂版 2001）



旧約聖書には戦争に関する多くの記事があり、しかも「聖絶」さえ命じる残忍な神という印象すら抱くことに戸惑いを覚える人にお奨めしたい。旧約聖書で戦争は、第一段階が初期のカナン征服のための戦争、第二段階が王国時代の領土防衛のための戦争、そして第三段階が後期の負け戦（王国滅亡）という3段階に分けられ、この全体を通して結局「戦争は何の解決にもならなかった」ことを語っている。しかも好戦的な戦士であるかのように自己啓示された神が、新約聖書では「十字架に死なれた神」である。この福音の根本を忘れてはならない。にもかかわらずこれを忘れて教会が好戦的な姿勢をとる過ちを再三再四、犯してしまったと分析。

●『暴力考』ジャック・エリュール（すぐ書房、1976）



不正な暴力にも甘んじる姿勢を貫き、他者の苦しみのためには、決して黙認せず断固として戦う。それは決して暴力に訴えることをせず、あくまでも御霊と信仰に基づく霊的な戦いであるべき。「人間を他の動物と区別するのは、この『あなたは殺してはならない』」なのである。…動物は殺す必要のあるものを殺す。その動物にとって殺すことは少しも問題にはならない。…『あなたは殺してはならない』は人間の真のあり方をあらわすことばなのだ。…イエス・キリストに対する信仰、敵に対する愛、愛による悪の克服——を人は絶対的な非妥協性をもって確認し、教え、生きなければならないのだ。徹底的に生命の尊厳に基づいた「非戦」の生き方を示す良書。

●『荒れ野の40年』ヴァイツゼッカー（新版、岩波ブックレット、2009）



1985年5月8日、ドイツ敗戦40周年に当時ドイツの大統領ヴァイツゼッカーが語った演説の全文。1993年の終戦記念日に、当時の土井たか子衆議院議長が、日本の「戦争責任」、アジアの人々への謝罪を言明した中で、「過去に目を閉ざす者は結局のところ現在にも盲目となります」。という名言を引用。その直後に次の言葉が続く。「非人間的な行為を心に刻もうとしない者は、またそうした危険に陥りやすいのです。ユダヤ民族は今も心に刻み、これからも常に心に刻みつづけるでありましょう。…まさしくこのためにこそ、心に刻むことなしに和解はありえない、という一事を理解せねばならぬのです」。何回読み直しても、深いうなずきを与えられる名言に満ちた名演説。

●『アジアのキリスト者とともに』太田和功（いのちのことば社、1986）



IFES（国際福音主義学生連盟）東アジア地区で奉仕され、多大な信頼と尊敬を得てきた著者ならではの提言に満ちた良書。アジア諸国の教会宛に、1944年当時の日本基督教団総理者、富田満牧師の名のもと送られた「日本基督教団より大東亜共栄圏に在る基督教徒に送る書翰」で、日本は天皇の下に、どれほど神から祝されている国かということ、それ故に欧米諸国の帝国主義からの解放をもたらそうと「聖なる戦争」「聖戦」をしていると訴えていることなどにも言及。時代の大きな流れの中にあっただとは言え、教会が戦争に積極的に荷担してしまった負の歴史の現実を知り、啞然とする。日本の教会の罪責を知らなくてはならない。

●『行動する預言者 崔昌華:ある在日韓国人牧師の生涯』 田中伸尚（岩波書店 2014）



1930 年、朝鮮半島のエルサレムと呼ばれた宣川（ソンチョン）で崔昌華は生まれた。彼が 15 歳のとき朝鮮が日本から解放されるも、その歓びは束の間で、教会の牧師・長老は共産主義の邪魔者となり、教会青年部リーダーだった崔も投獄され、半年間、はげしい拷問を受けた。この経験が彼の信仰を確固たるものにした。38 度線を、見も知らぬクリスチャンに助けられながら越境。ソウルの大学をようやく卒業したが、その年、朝鮮戦争が勃発。24 歳で単身渡日。神戸改革派神学校を出て、在日大韓キリスト教小倉教会牧師を 64 歳まで勤めた。ひとりの牧師が歩んだ道、それは厳しい選択の連続であり、日韓現代史を体現したものだ。その人生を日本人である著者はみごとに描き切った。朝鮮の人々がなぜいまも日本へ厳しい視線を向けるのか。そして神の言葉を実現しようとした一人の牧師の苦悩が、この本によってよくよく皮膚感覚としてわかった気がした。

●『戦争と検閲:石川達三を読み直す』 河原理子（岩波新書、2015）



沖縄の新聞社をつぶせばいい、という発言がとうとう政治家から出るような時代に突入した。新聞は私たちにとって命綱だ。新聞が真実を伝えられなくなったときどうなるか、歴史に学ぶよりほかない。著者は、現役朝日新聞記者で特に犯罪被害者の声によりそう記事が多数ある。さらに紙面でフランクフル『夜と霧』（強制収容所における心理学者の体験記）を追った連載は反響が大きく、単行本になり完売が続いた。今回、石川達三という同業者の「筆禍」をとりあげたのは、必然だった。きな臭い現代の動きと呼応しつつ、独特の感性と文体で石川達三の時代そのものが、新鮮な「事件」としてよみがえる。いま、読むべき一冊。

●『名前と人間』 田中克彦（岩波新書、1996）



著者は、一橋大学言語学名誉教授。いまでも大学入試問題に頻繁に登場する名著。人物の「名前」をみれば、民族のルーツを知ることができるが、なぜ人はときにそのルーツを隠そうとしたり、その時代や国家に同化するような名前を好むのか。その人間の心理と国家の論理のせめぎあいが、よくわかる本だ。私は、著者の『ことばと国家』を読んだとき、ずっと悩みつづけてきた自らのアイデンティティーの問題が、一挙に普遍的な事柄としてとらえられるようになった。戦争と平和を考えるにあたり、民族のアイデンティティーにも目を向けることは、人間観、あるいは国家と何かを考える基礎となるだろう。

●『平和をつくる教会をめざして』袴田康裕編（一麦出版社、2009）

●『世の光となる教会をめざして』袴田康裕編（一麦出版社、2013）



両書は姉妹本であり、2005年から2013年に日本キリスト改革派教会西部中会世と教会に関する委員会主催で行われた8・15集会、2・11集会、ならびに関連する諸集会の講演録です。講演者は、改革派教会内に留まらず、外部からも最上敏樹氏、岡田明氏、野田正彰氏、高橋哲哉氏、松浦悟郎氏、和田進氏と広がりがあります。編者のあとがきにも記されているとおり、「現代日本におけるキリスト者と教会が、その政治的・社会的責任を果たしていくための多面的で貴重な情報が豊かに含まれて」います。

●『教会と宗教に関する問答集』

日本キリスト改革派教会大会 世と教会に関する委員会（聖恵授産所出版部、1996）



日本キリスト改革派教会は、創立30周年にあたる1976年に「教会と国家に関する信仰の宣言」を発表しましたが、本書は、この宣言に従ってキリスト者として信仰生活を歩むにあたり、国家あるいは政治との関わりに関して問答形式において記したマニュアル的な文書です。内容は、「1. 教会と国家、2. 信教の自由と政教分離、3. 宗教と習俗、4. 天皇制、5. 靖国神社問題、6. 戦争と平和」です。出版が20年近く前のため、社会状況は大きく変化していますが、現在においてもまったく色あせることなく、私たちがキリスト者として生きるための、求められる指針が示されています。

●『改憲へ向かう日本の危機と教会の闘い』

信州夏期宣教講座編（いのちのことば社、2014）



信州夏期宣教講座は、「自らの福音理解と宣教のあり方を問い直し、主の教会の使命を検討する」ために、1993年に始められた集会であり、以後、毎年集会が開催され、報告号が「21世紀ブックレット」として出版されています。本書の「はじめに」で、小寺肇氏は、「原発問題・憲法問題。これらを見無視して宣教することはできない。なぜなら、教会はそれらの問題を抱えたこの時代に生きる人々に福音を伝えなければならないからである」と記しているが、本書は、歴史に学びつつ、現代に生きる私たちの宣教の課題を真摯に考えていくことが出来ます。

●『ドイツ脱原発倫理委員会報告』安全なエネルギー供給に関する倫理委員会、吉田文和、ミランダ・シュラーズ編訳（大月書店、2013）



ドイツでは原発問題に限らず、道徳的・倫理的問題を検討するために国家倫理審議会が設置されます。原発に関する生命科学の倫理問題に関しても、自然科学・医学・神学・哲学・社会科学・法学・環境・経済学などのメンバーが集まり、意見や提案・報告を提出しました。その結果を受けて、ドイツは「脱原発」を宣言しました。国家レベルの審議会に、技術者ばかりか、神学者・哲学者が加わり、社会形成に加わっていくことが大切なことを、私たち日本に生きるキリスト者にも語りかけています。

①『おとなになれなかった弟たちに』 米倉斉加年（偕成社、1983）



絵本です。胸を抉る絵本です。戦争中、栄養失調で死んでしまった可愛い弟のヒロユキ。ヒロユキの大切なミルクを隠れて飲んでしまった「ぼく」。「ぼくにはそれがどんなに悪いことか、よくわかっていたのです。でも、ぼくは飲んでしまいました。」胸を叩きつつ語る著者の慟哭が聞こえてくるようです。

②『あのころはフリードリヒがいた』 ハンス・ペーター・リヒター（新版、岩波少年文庫、2000）



小学校高学年から中学生くらいを対象とした本だと思いますが、大学生にもぜひ。ナチス支配の足音がひたひたと迫るドイツが舞台。主人公のぼくはユダヤ人の少年フリードリヒと大の仲良しです。しかし、やがて無邪気な少年たちの頭上をも、時代の黒雲が覆い尽くしていく。「あの頃には、まだフリードリヒがいた！」時代に無関心であることが、どれほど恐ろしいことかを思わせる一冊です。

③『フランク・オコナー短編集』収録「国賓」 フランク・オコナー（岩波文庫、2008）



短編の名手オコナーが切り取ってみせた「戦争」。内戦で捕虜となった二人のイギリス人と、見張りの兵士たちは、敵味方でありながらやがて気心の知れた会話を交わすようになります。しかし、そこに司令部から捕虜を処刑せよとの通達が来て…。

戦争が、「敵」もまたひとりの人間であるという当たり前の事実を覆い隠さなければ成立しないということ、どれほど言い訳したところで、戦争とは、誰かにとってかけがえのない人のいのちを奪うことであるということが、何とも言えない余韻の中、浮彫りにされる一篇。

④『戦争と罪責』 野田正彰（岩波書店、1998）



精神医学者の著者が、戦争で行なった残虐行為に心苛まれていた元兵士からの聞き取り調査をまとめた一冊です。戦争体験が、圧倒的に被害者側の視点から語られることが多いのに対し、これは加害者側の心の傷にふれる貴重な一冊です。「＜悲しむ力＞をとりもどすために」一本の帯にあった言葉です。重い心の蓋を開いて自らの罪と向き合っこそ、本当の回復が与えられる—私たちと、私たちの社会は、この『悲しむ力』をとりもどさなければならないのではないのでしょうか。

●『三浦綾子さんのことばと聖書:100の祈り』

込堂一博 (いのちのことば社フォレストブック、2014)



著者は、20年余り旭川市で牧師を務め、生前の三浦夫妻に身近に接した人です。戦前熱烈な軍国主義教師であった三浦綾子さんは、敗戦後の絶望感と闘病生活の中でキリスト者となり、作家となつてからは一貫して平和を訴え続けました。著者は、東日本大震災や改憲問題をめぐって危機的な状況を迎えている日本で、「もし今、三浦綾子さんが生きていたら、どのようなメッセージを発信されるだろうか」と考えつつ執筆しました。多くの三浦作品の中から厳選して引用した100の感動的なエッセイを通し、その生涯をかけて反戦平和を願い続けた三浦綾子さん、そして著者の熱き思いが伝わってきます。

●『敗北を抱きしめて 上・下巻』ジョン・ダワー (岩波書店、2001) (その後増補版あり)



本書の著者は、当代第一級の歴史家であり、本書によりピューリッツァー賞を初め10を超える賞を受賞しました。太平洋戦争において「鬼畜米英」を旗印にアメリカと戦争をした日本が、戦後一転して極めて親米的な同盟国となったことに注目したことが本書執筆の動機となっています。

進駐軍という圧倒的な勝者による上からの革命に、「敗北を抱きしめながら」民衆がどのように呼応したかを実に豊富な資料を駆使して、見事に描き出しています。今日まで続く「戦後」の起源が、歴史の光に照らされ、今の日本を考える上での必読書です。

●『キリストの証人たち 抵抗に生きる』第二巻 (日本基督教団出版局、1974)

このシリーズは全四巻からなり、キリストへの信仰に基いて国家権力や対決すべき思想・差別・偏見と闘い、抵抗したキリスト者たちの伝記をまとめたものです。この第二巻では、柏木義円、D・ボンヘッファー、久布白落実、J・ロマドカ、浅見仙作の抵抗が紹介されており、現代の私たちへの強いチャレンジです。

柏木義円は、群馬県安中で40年間牧師を務め、『上毛教界月報』を通して生涯非戦の戦いを続けました。ボンヘッファーは第二次大戦下のドイツで、ヒットラーに対する地下抵抗運動に参加して逮捕され、獄中で処刑されました。久布白落実は女性として女性の人権を守る運動と反戦平和運動を貫き、浅見仙作は無教会の信徒伝道者として妥協なき非戦の戦いをし、ロマドカはチェコでファシズムと戦い続けた人です。

●『昭和史 戦後篇』半藤一利 (平凡社、2006) (文庫版あり)



本書の著者は、ジャーナリスティックな感覚を持つ、著名な歴史作家で、多くの著作を世に送り出しています。本書は、同じ出版社から出た『幕末史』、『昭和史 1926-1945』に続く3部作の最後の書です。これらはすべて市民相手の歴史講座で語られた話をまとめたもので、わかりやすく、生き生きと日本の近現代史が浮かび上がってきます。本書の帯に『日本人はまた戦争をするのか』と記されているように、著者は現在の日本の進んでいる方向に大きな警鐘を鳴らしています。アジア・太平洋戦争の破局への道を分析し、そこからの教訓として、「小さな箱（組織や習慣）から出る勇氣」と「大局的な展望能力を持つ」ために、大いに勉強することを勧めています。

●『平和をつくる教会をめざして』袴田康裕編（一麦出版社、2009）



2・11 集会と 8・15 集会の講演集です。日本に生きるキリスト者と教会の責任を真剣に問うた 9 つの講演が収録されています。講演者は牧師、神学者、国際法学者、比較文化精神医学者、高校教師と多岐にわたります。この本は日本における「教会と国家」の問題を考える上でのスタンダードな位置を要求しうるものと言えます。それゆえ、この本を精読すれば、この問題を考える基本的視座が与えられます。

●『世の光となる教会をめざして』袴田康裕編（一麦出版社、2013）



『平和をつくる教会をめざして』の続編にあたる講演集です。日本キリスト改革派教会に所属する牧師以外に、哲学者の高橋哲哉、キリスト教学者の水垣渉、カトリック司教の松浦悟郎、経済学者の長谷部弘らの講演を収録しています。本書に貫かれているのは、国家や公権力の問題を聖書・信仰の視点で把握し、それを思想化しようとしていることです。確かな視座を獲得するための良書と言えます。

●『スコットランドにおける教会と国家』トマス・ブラウン（すぐ書房、1986）



この本は、16 世紀から 19 世紀にいたるスコットランド教会の歴史を、教会の霊的自律（スピリチュアル・インデペンデンス）という観点から描いた名著です。教会の頭がイエス・キリストであるということは、具体的な教会の歩みにおいて何を意味するのか。歴史をとおして、そのことを明確に教える本です。教会の霊的自律が問われている今日の日本の教会が、今こそ読むべき本だと言えます。

●『たといそうでなくても』安利淑（待晨社、1972）



世の大勢が偶像礼拝と戦争協力に流される戦中、信仰者としての歩みを貫こうとした著者の証し。当時このような生き方をした人がいたという事実には驚かされ、励まされます。

●『十七歳の硫黄島』秋草鶴次（文春新書、2006）



戦争は兵士だけのものではありません。15 才の少年も戦場へ動員されました。他に、島本慈子『戦争で死ぬ、ということ』（岩波新書、2006）や、早乙女勝元『東京大空襲—昭和 20 年 3 月 10 日の記録』（岩波新書、1971）も、戦争がリアルな実体験としてはどのようなものであるかを、戦争体験の無い私たちに教えてくれます。

●『クワイ河収容所』アーネスト ゴードン（ちくま学芸文庫、1995）



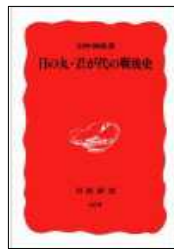
戦争は非人間的な悲惨極まるものですが、その直中でなお人格を持つ人間として生きた人たちの存在を伝える尊い記録です。著者は帰国後牧師となっています。他に有名な、ヴィクトール・E・フランクル『夜と霧』（新版、みすず書房、2002）も、同様の趣旨でお薦め致します。

●『失敗の本質：日本軍の組織論的研究』戸部良一ほか（中公文庫、1991）



なぜ日本は悲惨な戦争をしてしまったのかを考える切り口は多様にありますが、皮相的な批判や正当化ではなく、反省と再発防止の土台となる本質的視点も持たたいものです。他に、柳田邦男『零式戦闘機』『零戦燃ゆ』（文春文庫）『この国の失敗の本質』（講談社文庫）も同様の趣旨でお薦め致します。美化されがちな零戦の存在から、日米の「命に対する考え方」の違いや、技術思想の違い、文化の違いを教えられます。山本七平『日本はなぜ敗れるのか：敗因 21 カ条』（角川 one テーマ 21）も興味深い内容です。

●『日の丸・君が代の戦後史』田中伸尚（岩波新書、2000）



国旗国家の扱いの課題を考えるには、当然、日の丸君が代がどのような歴史を担って来たのかを視野に入れなくてはなりません。日本で教育の現場を考えるにはこの他に、『教育と国家』高橋哲哉（講談社現代新書、2004）もお薦め致します。

星出 卓也（牧師、日本長老教会西武柳沢教会）

●『戦争・ナチズム・教会：現代ドイツ福音主義教会史論』河島幸夫（新教出版、1993）



ドイツ教会闘争をその前史からの思想、教会の状況を緻密に分析。ドイツ教会闘争のみならず、ナチス安楽死作戦に対して、キリスト教系病院が対応した抵抗運動を詳細に分析している。戦争が進行していく中で、教勢を伸ばすために国策に則り、戦争を鼓舞した説教が行われたことなども緻密に例示、今日の教会の説教の在り方においても良き示唆を与えている。

吉川 直美（牧師、聖契神学校教師）

●『荒れ野の40年：ヴァイツゼッカー大統領終戦40周年記念演説』

リヒャルト・フォン・ヴァイツゼッカー（岩波ブックレットNo.767、2009）



「過去に目を閉ざすものは現在にも盲目となる」で歴史に名を刻んだヴァイツゼッカー大統領の演説。戦後ドイツ紆余曲折の40年に旧約聖書の荒れ野の40年を重ね合わせて、真実から目をそらさず、過去に対する責任を引き受けるよう呼びかけた。翻って日本では、同年8月15日、中曽根首相が靖国神社にA級戦犯合祀後はじめて公式参拝をしており、更に30年を経た今、まさに過去に目を閉じたものの末路を世界に証明しているではないか。

●『国家の理想:戦時評論集』矢内原忠雄（岩波書店、1982）



日中戦争の引き金となった盧溝橋事件直後に『中央公論』に掲載され、帝国大学教授の座を追われる主因となった「国家の理想」はキリスト者矢内原忠雄の真骨頂と呼ぶに相応しい。「正義」（国際平和、弱者の保護）という理想なくして国家は真の国家たり得ず、現実の国家がその理想に背反するならば、国民はそれに抵抗しなければならない。それこそが国家の本質と理想を愛する者、即ち真正の愛国者であるとイザヤ書を引き合いに堂々と論じている。キリスト者は国家との関係において、信教の自由を守ることのみならず、国家の真の理想を示し、それに殉じる使命に召されているのだと背筋を伸ばされる。

●「土曜日」『美と集団の論理収録』中井正一、久野収編（中央公論社、1962）



軍靴の足音が近づく 1930 年代、美学者中井らはフランス民主戦線の週刊新聞『金曜日』に触発されて『土曜日』を刊行し、治安維持法違反で検挙されるまで、「精神の明晰」、「へだてなき友愛」、「真理への勇氣」を謳って、思想、芸術、文化を牽引した。その巻頭言として中井が執筆した時事評論は、鉄路を花で埋めるがごとく、今此処に生きて日常の営みを守ることにファシズムの克服を求めて今なお色褪せることがない。選者の揺れ動く 10 代をも下支えしてくれた。

④『戦争・平和・キリスト者』（現代神学叢書）ベイントン（新教出版社、1963）



教会史家ベイントンによるキリスト者の戦争論、平和論を学ぶための基本文献。古代世界から原子力時代に至るまでの西欧社会における緒論を詳らかにした上で、キリスト教会は戦争に対して、「平和主義」「正しい戦争」「聖なる戦争（十字軍）」という三つの立場（態度）のいずれかを取ってきたと洞察する。ベイントンは問う、自分自身はどこに立つのか、これからの時代どの立場を取るべきか、新しい態度があるとすればどのようなものか。刊行後、半世紀を過ぎるが、キリスト教会の趨勢はベイントンの問いを留保したまま歩んできてしまったのではないだろうか。

宮脇 聡史（大阪大学大学院准教授）

●『戦後和解：日本は<過去>から解き放たれるのか』小菅信子（中公新書、2005）



戦後どのように和解を進めるか、というテーマについて、まず近代以前の「神の前で赦しあい、忘れる」講和が近代化と国際法の発達とともに崩れ、勝者による制裁、そして 20 世紀に至って勝者による敗者の裁きへと移った様を概観する。戦争裁判を契機に、裁かれるものとそうでないものの線引きを確立して国際的な評価を得たドイツと、戦争裁判そのものに瑕疵があり、そのわだかまりを背景に戦争責任が曖昧となった日本を対比する。日本と英国の戦後の衝突と和解を詳述した上で、それを参照して日中和解の困難を分析する。「戦争責任」の根底にある思想とその働きを歴史と具体例を通して問い続けている。

●『戦争の記憶』イアン・ブルマ（ちくま学芸文庫、2003）



オランダ人で知日家でもある著者が、祖国を侵略したドイツと、かかわりの深い日本において多彩な取材を敢行して書かれている。戦勝国の裁判を前提とした通説を、ふたつの敗戦国における言説を用いて問い直すと共に、ドイツ、日本両国で聞かれる様々な声に対しても反発、距離感、共感を交錯させながら、その戦争観や記憶と忘却のあり方について多彩な角度から描いている。国際社会と日本、あるいはドイツと日本を善悪で単純に対比するようなことをせず、そこにある問題を一定の人間的共感をもって丁寧に洗い出している。

●『戦争の記憶を歩く:東南アジアのいま』早瀬晋三（岩波書店、2007）



アジア太平洋戦争に関する東南アジア各地の史跡や博物館をめぐり、史跡の紹介、歴史背景の叙述、歴史理解の特徴などを、豊富な写真と共に明快に解き明かしている。そこから浮かび上がるのは、一方ではそれぞれがそれぞれの国情に合わせて歴史の記憶の取捨選択をしており、必ずしも「客観的な歴史というものがある」というような単純なものではないことである。他方ではそれでも東南アジアにおける圧倒的な被害の記憶は歴史的事実に裏付けられており、現在の若者は「ポスト戦後」の世代として、罪責は負わなくとも東南アジアの人々の歴史認識とその背後にある史実に自覚的であることが不可欠であることを説く。

●『過去は死なない メディア・記憶・歴史』T・モーリス＝スズキ（岩波現代文庫、2014）



著者は歴史に関する論争の背後に、唯一絶対の「歴史」はないと明らかになったポストモダンな時代の中で、自分たちに好む歴史を書こうとする動きが強まっていることを指摘する。その前提として、歴史を記述し伝達するのに欠かせないメディアそのものの特徴に、歴史の解釈や事実の取捨選択の特徴を形成する重要な要因があることを指摘し、歴史小説、写真、映像、漫画、そしてインターネットなどのメディアの特徴と、それらが歴史解釈に関わる特徴を描き出す。そして恣意的な歴史の抹消や操作に対抗する『歴史への真摯さ』の重要性を訴える。

柳沢 美登里（声なき者の友の輪カタリスト）

●『平和つくりの道』ロナルド・J.サイダー（いのちのことば社、2004）



「平和」を考え行動する21世紀の日本のキリスト者に、ぜひ目を通して欲しい著作。第一部では、ローマ帝国圧政下に生き同胞ユダヤ人指導者から敵視され、十字架につけられ復活されたイエス・キリストこそ非暴力の源とみなし、旧新約聖書を概観した「平和つくり」の洞察を導く。第二部では、国家間戦争や内戦介入の多くで、自国の利益確保・拡大の名の下、民衆も戦争に賛同し推進派になる現実を見据えて、「平和つくり」を経済との関係で論じ、私たち自身のライフスタイルにまで焦点を当てている。「平和をつくる」とは見解の表明に留まらず、『私の生き方』そのものが問われるのだと視座の転換を迫られる。

●『敵対から共生へ 平和づくりの実践ガイド』ジョン・ポール・レデラック（東京ミッション研究所、2010）



敵対関係から起こる紛争を、構造や文化、時間経過という歴史的視点といった多層的なものの変化という面で捉え、理解することを助けてくれる著。そこから白黒を決着させる「紛争解決」でなく、「紛争変革」という理念を提唱。その適用のため、いくつかのものの見方を広げる訓練を提案。その一つに「多面的な時間枠を統合する能力を伸ばす」とある。21世紀ならではの、新たな時間理解と統合能力推進をチャレンジされる。

渡辺 祐子（明治学院大学教授）

●『未来への記憶 こくはく 敗戦 50 年・明治学院の自己検証』（ヨルダン社、1995）



学校法人明治学院は、ヘボンとブラウンの二人の宣教師がそれぞれ始めた私塾を起源とするキリスト教学校です。私はここに9年前着任しましたが、それより11年前の1995年、敗戦50年を記念して「明治学院の戦争責任・戦後責任の告白」を学院長名で発表し、内外の注目を集めました。なぜこの告白の発表に思い至ったのか、学内ではどんな議論があったのか、学生たちの反応は、そして日本社会、隣国からどのような反響があったのかを、戦責告白発表の裏方を務めた先生方がまとめたのが本書です。

いくらキリスト教学校といっても大きな組織ですから、他の組織同様明治学院もたくさん問題や欠けを抱えています。それでもあの間違った侵略戦争に学院が加担した罪、さらに戦後もそのことについて総括をしてこなかった罪を主の前に告白した歴史は、教職員にとっては宝物といっても過言ではありません。常にこの歴史に立ち返り、自分たちの立ち位置を確かめ、進むべき道を考えることができるからです。

●『地鳴り 非戦平和の人生 82 年』小川武満（キリスト新聞社、1995）

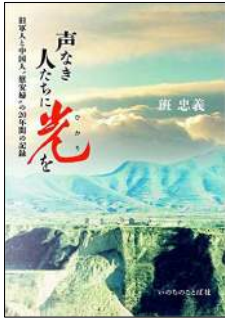


図らずも明治学院が戦責告白を発表した敗戦50年のこの年、小川武満先生の自伝が公刊されました。小川先生は1913年、旅順で生まれ、間もなく奉天（現瀋陽）に移り、ここで軍国少年として育ちます。しかしいっぽうでたくさんの中国人の友人をもち、彼らに対する日本人の横暴さに激しく反発するような正義感あふれる少年でした。五族協和スローガンを純粋に信じていた小川少年は、その理想を胸に抱いて1931年満州医科大学予科に入学します。しかし同年9月18日の満州事変勃発によって理想を打ち砕かれ、魂の彷徨を経て1932年に

日本基督教奉天教会林三喜雄牧師より受洗、中国での医療伝道の道を志すようになりました。1942年に入隊し軍医として働いた先生は、敗戦後も北京にとどまり、日本兵の処刑に立会ったり、戦犯となった旧日本兵の治療に当たられたりするなど、文字通り敗戦処理に当たられます。帰国後は、一度立てた中国での医療伝道の志を抱きつつ、無医村医療と伝道に携わり、非戦平和、とりわけ隣国中国との真の和解のために走り続けられました。中でも1985年に先生自ら設立した平和遺族会の会長としての働きはよく知られています。

小川先生が2003年に亡くなって早12年。先生が目指した幻を私たちも共に追いつけるために、本書を今こそ若い世代に手に取っていただきたいと思います。なお本書は『大地的呼声（一麦出版社、2005）』のタイトルで中国語にも訳されています。

●『声なき人たちに光を—旧軍人と中国人「慰安婦」の 20 年間の記録』班忠義（いのちのことば社、2015）



最後にこの原稿が図書館 HP にアップされる頃には書店に並んでいると思われる新刊書を紹介します。著者は中国人ドキュメンタリー作家の班忠義さん。

1990 年代の初め、韓国人元「慰安婦」の女性を皮切りにアジア各地で日本軍の性奴隷とされた女性たちが名乗りを上げる中、中国の元「慰安婦」にも注目が集まるようになりました。すべての被害女性たちが、壮絶な体験による

深刻な心身のトラウマに何十年も苦しめられていましたが、中国の場合、元「慰安婦」のおばあさんたちが置かれた境遇はとりわけ過酷で、国からも周

囲からもほとんど手を差し伸べられることなく、戦後長い間沈黙を強いられていました。当時日本留学中だった班さんはその事実を知りすぐに行動を起こします。中国人元「慰安婦」を支える会が設立され、班さんは支援金を手に元「慰安婦」のおばあさんたちが少しでも人間らしい生活が送れるよう、中国中を奔走しました。

その最初の記録が『ガイサンシーとその姉妹たち』にまとめられ、同名のドキュメンタリーも製作されました。本書はその第 2 弾で、班さんのこれまでの活動やおばあさんたちとの出会いを通して班さんが考えてきたことが暖かい筆致でつづられています。班さんはクリスチャンの奥さんと出会ってご自身も洗礼を受けられますが、現在の日中関係に対するキリスト者としての班さんの見解も率直に記されています（宣伝めいて恐縮ですが、私は本書の序文を書かせていただく光栄に与かりました）。

戦後最悪といわれる状態がずっと続いている日中関係ですが、その根底に横たわっている日本の戦争責任をじっくり考えるためには是非お勧めしたい本です。

山口 陽一（東京基督教大学教授）

●『深き淵より—キリスト教の戦争経験』安藤肇（キリスト新聞社、復刻 2005）



キリスト教の戦争責任を問う最初の本。プロテスタント宣教百年の 1959 年、祝賀の前にすべきことがあると、安藤肇牧師は教会とミッションスクール、賀川豊彦の戦争責任を「追及」した。「本気で宗教を信じようとする人は、戦時中の宗教団体の敗北の姿を正視するだけの勇気を持たなければならない。より真実な信仰をうるために、二度とあやまちをくりかえさないために」（二、教会の戦争経験）

私は神学生時代、西荻のキリスト教古書店でこの本を手にして夢中で読んだ。1959 年に再版まで発行された本書をそののち古書店で見るとはなかった。日本のキリスト教の戦争責任に関する幻の本がキリスト新聞社から復刻されたのは 2005 年。その安藤肇牧師も昨年、主のもとに召されたが、遺された書物をとおして語り続けている。

●『キリスト教会と天皇制 歴史家の視点から考える』土肥昭夫（新教新書、2012）



土肥昭夫には『天皇とキリスト—近現代天皇制とキリスト教の教会史的考察』という16篇の学術論文集がある。その重厚な研究をふまえてのエッセイ風の論説、奨励、講演が本書であり、親しみやすく読み易い。

私は土肥氏の書物を読むことから日本キリスト教史の研究に入った。お会いしたことは一度しかないが、書かれることの（学問的）厳しさと違い、とても暖かい人柄を感じた。土肥昭夫氏が召されて8年になる。突然の訃報に接し、類まれな歴史神学者の洞察にもはや学べないと落胆したことを思い起こす。しかし、妻淳子氏により同氏の円熟した研究が世に送り出されていることに感謝したい。本書もその一つである。

●『信教の自由の事件史：日本のキリスト教をめぐる』

鈴木範久（オリエンズ宗教研究所、2010）



全23章の題を並べてみる。「フルベッキの〈ブリーフスケッチ〉」、「森有礼の〈宗教自由論〉」、「中村敬宇の〈上書〉」、「葬儀の自由」、「高梁教会事件」、「公許の建白」、「大日本帝国憲法の発布」、「内村鑑三不敬事件」、「熊本英学校事件」、「巢鴨監獄教誨師事件」、「訓令一・二号問題」、「『青年之福音』事件」、「矢部喜好兵役拒否」、「蘆花〈謀反論〉」、「新潟の〈楠公事件〉」、「新渡戸稲造・松山事件」、「上智大学靖国神社参拝拒否事件」、「美濃ミッション事件」、「奄美大島事件」、「矢内原忠雄辞職事件」、「灯台社事件」、「ホーリネス教会事件」。ここまでの戦前・戦中、こうして見ると近世のキリシタン禁制はある意味で近代に連続している。そして最終章「保障された〈信教の自由〉のなかで」でも、天皇に信教の自由なし、「町のヤスクニ」、日の丸・君が代の強制、政教分離をめぐる裁判というテーマが並び、戦後は戦前とある意味で連続していることに気づかされる。

ごく最近の読書から：

●『いま、「靖国」を問う意味』田中伸尚（岩波ブックレット929、2015）国家儀礼と戦争の関係を追い続けるジャーナリストが、言い続けてきたことはいよいよ顕在化している。教会での読書会に最適。

●『右傾化する日本政治』中野晃一（岩波新書1553、2015）SEALDsのデモでも切れ味よくスピーチした政治学者が、この30年の日本政治を世界の文脈で振り返り展望する。

●『沖縄の米軍基地「県外移設」を考える』（集英社新書0790B、2015）基地は沖縄にも本土にもいない！と主張してきた平和運動も、沖縄を犠牲にしてきた「本土」の側にいることを指摘。

●『AERA [特集 戦後70年]終わらない戦後』佐藤優特別編集（朝日新聞出版、2015年8月10日号）。

計71冊（ザーカル会9冊、識者65冊）重複を除く。

選者 15 名リスト（敬称略、名前 50 音順）

●朝岡勝(あさおか まさる)

1968 年、土浦市生まれ。東京基督教短期大学、神戸改革派神学校卒業。岡山、神戸をへて、現在、日本同盟基督教団徳丸町キリスト教会牧師。特定秘密保護法に反対する牧師の会共同代表。

●石浜みかる(いしはま みかる)

1941 年生まれ。戦時中、クリスチャンであった父親が治安維持法違反で投獄。神戸女学院大学卒業後に英語教師、専門学校教師の傍ら著作活動、講演を通して戦争と平和を現在に伝える。

●大嶋重徳(おおしま しげのり)

1974 年生まれ。キリスト者学生会(KGK)主事、神戸改革派神学校を卒業後、KGK 主事に復帰。現在、同会副総主事、学生宣教局長、沖縄地区担当主事。鳩ヶ谷福音自由教会協力伝道師。

●高木実(たかぎみのる)

1958 年生まれ。東京基督神学校卒。キリスト者学生会 (KGK) 関西地区主事を経て、現在、同会総主事。日本長老教会交野キリスト教会会員 (長老)。著作『生と性・「男と女」』ほか

●崔善愛(ちえ そんえ)

1959 年生まれ。ピアニスト。「外国人登録」の指紋押捺を拒否したことにより、二つの裁判を最高裁まで 20 年間闘い、2000 年に特別永住権を原状回復する。現在、恵泉女学園大学講師。

●辻幸宏(つじ ゆきひろ)

1966 年生まれ。弘前大学卒、神戸改革派神学校卒を経て、現在、日本キリスト改革派大垣教会牧師。信州夏期宣教講座事務局担当。

●徳永大(とくなが だい)

1964 年 生まれ。神戸大学卒業後、JICA (国際協力機構) 勤務。アフリカ (タンザニア) 勤務経験。聖書宣教会卒を経て、現在、日本福音キリスト教会連合門戸聖書教会牧師。

●中村敏(なかむら さとし)

1949 年生まれ。岩手大学、聖書神学舎卒。米国トリニティ神学校大学院修了。日本伝道福音教団新潟聖書教会で牧会を経て。現在、新潟聖書学院院長。

●袴田康裕(はかまた やすひろ)

1962 年生まれ。大阪府庁勤務、神戸改革派神学校卒。スコットランド、フリー・チャーチ・カレッジ留学、日本キリスト改革派園田教会牧師を経て、現在、神戸改革派神学校教授 (歴史神学)。

●廣瀬薫(ひろせ かおる)

1956 年生まれ。東京大学卒、建築会社勤務。東京基督神学校卒。日本同盟基督教団上大岡聖書教会、多摩教会牧師を経て、現在東京キリスト教学園理事長。

●星出卓也(ほしで たくや)

東京基督神学校卒。日本長老教会西武柳沢キリスト教会牧師。日本福音同盟(JEA)社会委員会委員、日本キリスト教協議会(NCC)靖国神社問題委員会委員。

●宮脇聡史(みやわき さとし)

東京大学卒。東京基督教大学国際キリスト教学専攻長を経て、現在、大阪大学大学院准教授。専門：フィリピン地域研究・宗教社会学・政治社会学。

●吉川直美(よしかわ なおみ)

東京・杉並生まれ。編集者、製本工芸(ルリユール)作家を経て、現在、東京中野にある単立シオンの群教会牧師。聖契神学校教師(霊性の神学、キリスト教倫理等)。女子寮主事。

●柳沢美登里(やなぎさわ みどり)

1960 年生まれ。1990 年から 12 年間、バングラディシュ・スラムで女性グループ支援、現地 NGO でのアウトカースト自立支援を経て 現在、「声なき者の友」の輪スタッフ。

●渡辺 祐子(わたなべ ゆうこ)

明治学院大学教授、専門：中国キリスト教史・近代日中キリスト教関係史、共著『境界を超えるキリスト教』2013

●山口陽一(やまぐち よういち)

1958 年生まれ。金沢大学、東京基督神学校卒、立教大学大学院 (修士)。東京基督神学校校長を経て東京基督教大学教授・大学院神学研究科委員長。専門：日本キリスト教史、実践神学。

■ キリスト教と戦争と平和に関するキーワード（順不同）

正しい戦争と不正な戦争、正戦、聖戦、絶対平和主義、非暴力、非戦論、戦争への正義、戦争における正義、戦争後の正義、キリスト教現実主義、十戒、終末論、贖罪論、愛敵の教え、シャロームの概念、抵抗権、ルターニ王国説、殉教、安全保障、日本国憲法九条、国連平和維持活動（PKO）、平和学、積極的平和、消極的平和、構造的暴力、良心的兵役拒否、武力紛争、国際法、自衛権、戦争と国家、教会と国家、戦争と内政、戦争と国際社会、戦争責任、靖国神社、戦後補償、追悼、良心、愛国心、抑止力、和解、地域性、時代性、修復的正義。

■ 事典・辞書・ハンドブックなど

- 『歴史問題ハンドブック』東郷和彦ほか編（岩波書店、2015）
- 『平和を考えるための 100 冊+α』日本平和学会編（法律文化社、2014）
- 『世界戦争事典』ジョージ・C・コーン（河出書房新社 2014）
- 『キリスト教平和学事典』関西学院大学キリスト教と文化研究センター編（教文館、2009）
- 『平和学を学ぶ人のために』君島東彦編（世界思想社、2009）
- 『平和人物大事典』（日本図書センター 2006）
- 『平和憲法と軍事力廃止：提言・考察・資料』大河原礼三（沖縄タイムス社 2004）
- 『はじめて出会う平和学：未来はここからはじまる』児玉克哉ほか（有斐閣 2004）
- 『地図で読む現代戦争事典』F・ジェレ著（河出書房新社 2003）
- 『平和学がわかる。』朝日新聞社【編】（AERA MOOK, 朝日新聞社, 2002）
- 『世界戦争犯罪事典』秦郁彦ほか（文藝春秋 2002）
- 『現代の戦争：岩波小辞典』前田哲男編（岩波書店 2002）
- 『戦時下資料事典』1-3（日本図書センター 2002）
- 『しらべる戦争遺跡の事典』十菱駿武ほか編（柏書房 2002-2003）
- 『戦争を知るための平和学入門』高柳先男（ちくまプリマーBooks 2000）
- 『キーワード日本の戦争犯罪』小田部雄次ほか（雄山閣出版 1995）
- 『戦争と平和の事典：現代史を読むキーワード』松井愈[ほか（高文研, 1995）
- 『平和事典』広島平和文化センター編（勁草書房 1991） 新訂
- 『軍縮ハンドブック：平和をよむキーワード 100』宇都宮軍縮研究室編（にんげん社 1989）
- 『戦時下のキリスト教運動：特高資料による昭和十一年・昭和十九年』同志社大学人文科学研究
所キリスト教社会問題研究会編（新教出版社 1972-1973）3 冊

日本の教会の戦後 50+20 年：戦後 70 年ブックガイド

発行：2015 年 8 月 15 日

編集：阿部 伊作

発行：東京基督教大学図書館

〒270-1347 千葉県印西市内野 3-301-5-1（非売品）